

報 阿 口

令和4年12月1日
第109号
栗山町開拓記念館

◎栗山の開祖 泉麟太郎翁は
どうして栗山町へ入ることに
なったのでしょうか

明治二二（一八八八）年五月にアノロ原野（現栗山町角田）を拓いた泉麟太郎（添田家四男で二二歳の時に泉靖七郎の養子となる）は、明治三（一八七〇）年に添田家の三男（実兄）添田龍吉とともに室蘭を拓きました。

戊辰戦争と

敗戦後の仙台藩・角田石川家
今までの土地から去る事情

鳥羽伏見の戦いから火蓋を切った戊辰戦争は、明治元（一八六八）年一月十五日に成立した新政府側の優位のうちに戦局が展開し、やがて戦火は東北にまで及んできました。新政府は、仙台藩に対して会津藩主の松平容保を討討すべしとの命令を下しました。しかし、仙台藩出兵の遅いことに業を煮やし、三月二〇日奥羽鎮撫一行薩長筑三藩五四〇名の軍勢が仙台に入りました。仙台藩は四月十二日、会津降伏嘆願を行い、九条鎮撫総督が受理の姿勢を見せるも、参謀世良修蔵の主張により「会津藩は許されざる朝敵である」と拒否されました。四月十九日、世良は羽前（山形県南部）の参謀の大山宛に「奥羽諸藩は、中々討伐に向かおうとしない。そこで、この際、奥羽全体を敵とみなして攻撃してはどうか」と、手紙を書いたのですが、大山に届かず世良に反感を抱いていた仙台藩士浪上主膳らの手に渡りました。どうせ戦争が避けられないなら、世良を斬って政府軍と戦おうと決まり、世良は斬首されました。

奥羽越列藩同盟

この結果、会津攻めに向かったはずの仙台藩はじめ奥羽の諸藩は新政府軍と戦うのみです。四月二二日、仙台・米沢両藩の提唱で奥羽二五藩が白石城に会合し、会津討伐を解き、列藩攻守同盟を結び、五月三日奥羽列藩同盟を成立させ、その後、越後六藩も加盟し、三一藩からなる奥羽越列藩同盟の結成となり、戊辰戦争は会津藩の攻防を軸に、舞台を東北に移して五カ月半に及ぶ激しい戦いを繰り広げていくことになります。

角田支藩（領主石川邦光）は、会津藩が白河城を攻め、一進一退のところへ応援にいくよう命ぜられ、五月下旬進軍していききました。泉麟太郎、田中鼎助の率いる二小隊は、大立目武蔵の率いる四小隊とともに白川を迂回して三春、棚倉、二本松で苦難の転戦を続けていました。

七月二九日、二本松城が落城、八月七日には、相馬口の戦闘が開始され、翌八日には藩境の駒ヶ嶺で激戦となり、十一日新政府軍に占領されました。

列藩同盟に陰りが

石川軍勢が苦戦を続けたように、米を作ることに知らない東北の各藩と、対して新式の武器を装備した新政府軍とでは勝負にならなかったのです。

七月一日、奥羽鎮撫使総督を迎えた秋田藩ではすでに同盟を離脱して新政府軍に呼応するようになり、七月十三日に平城が陥落すると同盟軍からの離脱が相次ぎ、九月四日には、盟主の一翼であった米沢藩降伏の報告があり、動揺大きい仙台藩は、九月十五日に降伏しました。最後の拠点会津城は九月二二日に陥落しました。こうして五カ月半に及ぶ東北戊辰戦争は終わりを告げました。

ところで、仙台藩が降伏するにあたり藩内では激論が交わされ、額兵隊の一派は藩主伊達慶邦の鎮撫を振り切り榎本武揚率いる艦隊に搭乗し箱館へ落ち延びていきました。榎本の下には新撰組副長の土方歳三がおり、箱館五稜郭を舞台に新政府軍と戦いましたが、五月十八日、榎本武揚以下の幕府軍は降伏しました。

敗戦後の処分

戊辰戦争に敗れた明治元年、仙台藩は領地を減らされ六二万石から二八万石となり直臣一万二千人、陪臣二万三千人の家臣団を養えるわけもなく、積極的な帰農（侍を捨て農民となること）許可を嘆願し許可されており帰農政策を進めていったのです。伊達家一門の角田石川家一三二九戸七千三九名も、禄を剥かれ、領地は召し上げられ、明治二年三月から南部藩が配置換えとなり、家もなく食べる術がなかったのです。麟太郎は「行くに與なく、帰るに家なく、借地の間、身の置くところなし」と、切羽詰まった状況を嘆きました。この時は二者択一で、仙台藩の伝手に頼るか、南部藩の門下で帰農して百姓をするか（武士が二君に仕えること）のいずれかでありました。二君に仕えることは武士として耐えがたいことでした。

そして石川邦光室蘭を検分

角田支藩は、新政府の「開拓布告」に協力する（北海道開拓へ向ける）ことにより石川家の立場を有利にすることが可能だとの調査をもとに協議し、激しい議論の末、八月に「開拓嘆願書」を出し九月に認められました。その内容は「北海

道の開拓は急を要する、家来その他有志を集め自費で移住するように」とのことであり、支配地は室蘭郡でありました。支配地は現地で引き渡すことであつたため角田支藩領主石川邦光ら十三名（泉忠廣、添田龍吉含む）は十月十三日から、雪と凍れによる厳しい冬の現地室蘭を検分に向きました。青森では雪に見舞われ、その後も寒さ、船酔い、強風、大風に見舞われ十一月十二日箱館に上陸し、出発して約四〇日後の二〇日に室蘭に到着しました。室蘭引き渡しにつき、有珠郡との境に三面標柱を立てました。ただ、積雪のため土壌の良否は判断できず、また、幌別側には三面標柱は立てませんでした。角田に戻ったのは、十二月二三日、新暦の二月上旬で極寒の中の旅であり途中主従共に凍死寸前という危機にも遭遇したものだと思われる心折れる厳しい往復七〇日間でありました。

◎麟太郎の生家のことについて



添田 龍吉翁

麟太郎の生家は、添田家で、仙台藩伊達家家来石川家に代々仕えた宿老の家でありました。兄添田龍吉は天保九（一八三八）年、添田保の三男として生まれましたが、二人の兄は夭逝したので嗣子として成長しました。八歳から角田支藩の学問所成教書院（石川家中の子弟を教育した学問所で、仙台藩十四郷学のひとつ）で学び、漢学者から読書・書道を学びまた槍術・馬術・砲術を学びました。明治三年、三三歳のときに開拓助勤を命じられ開拓移民団とともに室蘭に渡りました。

麟太郎は龍吉の四歳年下の実弟で天保十三（一八四二）年生まれで、兄と同じく成教書院で学び更に仙台で文武を収めました。二二歳のとき泉靖七郎の養子となり家督を継ぎました。明治三年、兄の龍吉とともに開拓移住団の助監を命じられ室蘭に渡りました。麟太郎は兄や親族の泉忠廣を助けその後の開拓事業で中心的な役割を果たしました。



泉 麟太郎翁

室蘭へ、第一陣四戸五一名

明けて明治三年三月十六日、四四戸、五一名（泉忠廣、添田龍吉、泉麟太郎含む）の第一次移住者は、仙台へ向け出発し、室蘭沖には四月六日到着しました。（この日を記念し輪西開村記念日は四月六日になっています）前年の明治二年は不作で米は非常に高く手に入るものではありませんでした。貝類、海藻、山菜で食いつなぎ、まず必要なものは塩であり、味噌も醤油も買えなかつたので、海水の利用にヒントを得て製塩場を建設することにしました。

ところが移住間もなく片倉家の幌別側と境界問題（三面標柱を立てないばかりに）が出ました。勇払郡詰めの大主典が漁場・山が削減される石川家不利の決定を言い渡し、これを不服とし開拓役所へ請願を行ったところ、開拓なら上川か空知を願ひ出るよう指示されました。麟太郎が、その調べの準備中に、とんでもないことが…

室蘭郡支配罷免・天地崩壊

先発移住者が苦闘をしている六月三日、伊達・片倉家の移住団が到着し、邦光から託された公文書には「五月二十七日付、石川邦光の室蘭郡支配罷免」という、まさに天地崩壊のような通知を受けました。室蘭郡は、伊達・片倉の両家に分配支配されることになり、すでに移住していた泉忠廣以下の第一陣は、石川家から切り離され、伊達・片倉家の家来に組み入れられることになったのです。伊達家には泉忠廣以下二十九名、片倉家には添田龍吉・泉麟太郎など十九名が組み入れられました。

国元、角田では帰農嘆願を

石川邦光は、第一陣を送り出したのち、第二陣の準備に取り掛かるのですが、自身、極寒地での一面の銀世界を前にした落胆の体験から帰農の気持ちは強く、家臣も現地角田で帰農する者の意向が強く、帰農嘆願を十五回にわたり行ったことに対し、開拓使から、「室蘭郡開拓を怠り引き延ばしたことは不都合である。よって支配を免ずる。これまでの移住者（泉忠廣・泉麟太郎・添田龍吉など）は伊達・片倉の管轄にする」と通達されました。邦光は、六月十三日謹慎を申し付けられていました。

覚悟の上の渡道！と説得に奔走

第一陣の者たちの余りに深刻な衝撃は、想像を絶するものとなりました。泉忠廣や龍吉・麟太郎らは、自らの怒りを抑え、仲間の動揺を静めるために「一旦、死を覚悟して渡道した以上、この場を流離することは武士の恥としなければならぬ。この時こそ益々勉強すべきである」と檄を飛ばして、説得に奔走しました。その辛い思いの中でもそれぞれに開拓を進めていました。

龍吉と麟太郎の活躍

龍吉は、持病が悪化し暫く床についていましたが、明治三年十一月湯治をしていた頃、鹿皮が有望な収入になることを知り、十二月アイヌを雇って翌四年の春まで鹿狩りを続けました。龍吉は、高島流砲術免許皆伝の腕前で予想以上の収穫がありました。肉類は自分たちや他家の者にも分け与え、皮と角は箱館に輸送して商いを行いました。非常に高価であり思いもかけない大金を得ることができました。この収益をもとに、明治四年五月龍吉は角田に帰郷し龍吉の妻と二・三男を始め二二人を伴って室蘭に戻りました。龍吉はこの年の暮れから翌五年にかけ再び鹿狩りを行いました。

明治四年七月、麟太郎は、若者十人を連れ札幌に出かけます。室蘭―札幌間の道路を開削中でその仕事に従事しました。この時、麟太郎は室蘭から帆立貝十駄を運んで行商、次に酒二・五樽を仕入れ、瞬く間に売れました。また、道路工事で木材の需要が多く請負師に頼まれ伐木に手を貸します。それを札幌に運び五百円の現金を手に入れました。

明治五年に室蘭へ帰った頃、札幌本道（室蘭―苫小牧―千歳―札幌―平地）の工事が行われており、麟太郎は工事従事者の需要を見込んで酒三〇樽を仕入れ、忽ち売り切れました。

廃藩置県

明治四年七月、廃藩置県が出され、明治五年四月、伊達・片倉の支配を開拓使に統括し、移住者を開拓使直属としました。規則により米・味噌が与えられ食の不安定から解放されました。泉忠廣は開拓使の「一等付属・室蘭移住取締人」に任ぜられ、石川家中はまとまりを強くしました。

ところが同五年九月、移住士族に対して突然、民籍編入（平民になること）の命令が出されることになりました。「兵農相兼ねる」の道を求め北海道に渡る決意をし、それを支えに労苦を重ねてきたものには動揺は激しいものでした。士気は下がりました。

これを心配した麟太郎は泉忠廣、龍吉らと相談し、旧主石川邦光に移住を願うほかにないと考え、同月自ら角田に赴くことになりました。

角田に戻った麟太郎は旧主邦光に対し必死の渡道の説得にも拘らず「一度罷免されたものがおめおめと室蘭に出ていくわけにはいかぬ」と、何としても承知しませんでした。ところが、同席していた邦光の弟光親は、「せつかく北海道開拓を志願し第一陣が移住したのに、計画が中断して移住団が解散したのでは、既移住者を見殺しすることになる。これ全て石川家の恥であるから、私が兄の代理として渡道したい」と申し出、邦光もこれを許しました。光親はこの時、十二歳で年少の光親の大人にも等しい見事な決意はどこから生まれたのでしょうか。

翌六（一八七三）年一月、光親と三戸の移住者が麟太郎の先導で室蘭に到着しました。年少とはいえ光親を迎えたことは移住者たちにとって一つのよりどころとなり、落ち着きを取り戻して、光親のもとに盟約を結んで開拓への決意を新たにしました。

麟太郎は、学費を全戸で分担して、光親を三年間慶応義塾で学ばせることにしました。麟太郎自身、教育を身につけた知識人であったため、光親に高い教育を受けさせる必要を痛感したのでしょう。光親は、のち室蘭に戻り室蘭郡書記になるなど、以後北海道開拓に生涯を送ることになります。

光親二〇歳の明治十三（一八八〇）年、麟太郎を伴って帰郷、兄の邦光に対して「移住民が少なく互いの競争もなく、勉強する力も乏しくなるので、角田の有志を促して移住させるようにしてもらいたい」と述べ、邦光も大いに賛成し、明治十四年四月、移住第二陣六戸二二人は、角田を出発し室蘭へ向かいました。これで明治十四年の石川家の移住民は、九七戸三三一人となりました。

以後、角田藩士らは、牧畜・養蚕・林業・園芸・炭焼き・製網・製氷・製鉄・製糸・機械など事業は広範囲に営まれ、室蘭は益々活発になっていきます。

明治十七年、泉忠廣は高齢を理由に戸長をはじめすべての公職を辞退、麟太郎が後任となりました。

明治二〇年、輪西村に屯田兵一〇戸五二八人が入村し、さらに二二年には一一〇戸が入村することになり、狭い土地での屯田兵との競合は無理でありこれ以上の開拓拡張は期待できません。泉忠廣、龍吉、麟太郎らには、新天地を求め「第二の角田郷を創設しよう」との考えがありました。麟太郎は、室蘭郡長・古川浩平の助言で夕張のアノロの土地が有望であることを知り、明治二二年三月、「夕張開墾起業組合」を作りました。

◎ いぎ、アノロへ

同年五月三日、選抜された麟太郎以下七戸二四人は室蘭輪西を後にアノロへ向かいました。夕張川は折からの増水で待たされ、原始林で熊に怯えつつ、五日の野宿の後、ついに十六日アノロへ渡りました。最初に渡ったのは、赤子を持つ浅野幸七郎の妻で、「万一のことがあっても、女性なので開拓労力への被害は少ない」からでした。

丸木舟で渡したのは、言うまでもなくアイヌの「下夕張鉄五郎・別名テツピリア」でした。

（参考文献）

角田石川氏四百年
北の大地を拓く 角田市教育委員会
石川家臣団の室蘭開拓辛酸記 室蘭地方史研究会

栗山町開拓記念館 研究員 坂口 昇一
栗山町 教育委員会 発行